

# 口頭発表「馬宮西小学校の動物介在教育」

## —全学年の教科等に発展させる継続飼育体験—

鈴木克彦

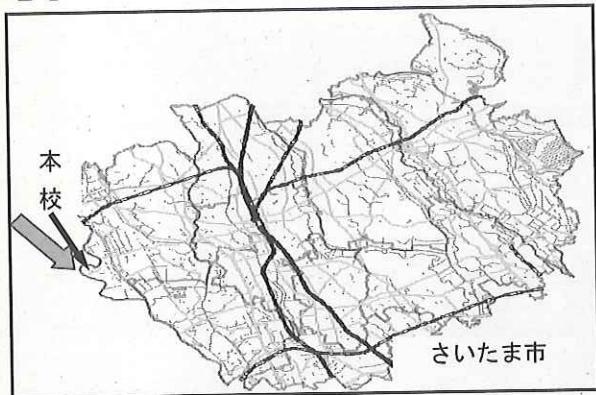


### 1 本校の概要

本校は、さいたま市の最西端、荒川とびん沼川に囲まれた田園地域に位置する、全校68名のさいたま市で一番小さな学校である。

緑が多く、自然も豊かな地域で、祖父母が農業をしている家庭も多く、日頃から動植物に接している。カエルやバッタ、カナヘビなどもいて、大変のどかな地域である。

休み時間なども他学年と遊び、上級生が下級生の面倒をよく見ていて、縦割りの素地もできている。



### 2 研究の概要

本校は、平成19・20年度さいたま市教育委員会より、「動物介在教育」の研究委嘱を受け、「動物との交流を通しての豊かな心の育成」を研究主題と設定し、「命を大切にする子の育成を目指して」をサブテーマとして、理科・生活科・道徳の授業実践を中心とした研究を推進してきた。

動物介在教育の7つの視点 (①命の大切さを学ぶ②愛する心の育成③人を思いやる

心④動物への興味関心⑤生きる力⑥緊張の緩和⑦擬似子育体験) の中から、「命の大切さを知る」「思いやりの心をもつ」の2点を本校の研究の視点とした。

具体的に目指す児童像を「人の痛みや気持ちが分かる子」「最後までやりぬく子」「自分の思いを伝えられる子」の3点からとらえ、仮説を立てた。その仮説を基に、授業研究を通して動物介在教育とのかかわり、獣医師とのかかわり、動物とのかかわりを考慮して研究を進めていった。

#### (1) 研究の視点

- 命の大切さを知る
- 思いやりの心をもつ

#### (2) 動物介在教育の視点

- 【生命尊重】⇒人や動物の
- 【思いやり】⇒友だちや下級生への、動物への
- 【愛する心】⇒人や動物を動物との触れ合いや世話を通して、生命を大切にする子、豊かな心の育成を図る。

#### <手立て>

- ①生活科・理科・道徳の学習の充実
- ②飼育栽培委員会の活動
- ③縦割り飼育当番活動  
⇒年間指導計画を作成するに当たり、上記の視点のある教材や単元を動物介在教育の授業の中心とした。

#### (3) 目指す児童像

- 人の痛みや気持ちが分かる子  
低学年：人の気持ちを思いやってやさしくできる子  
中学年：人の気持ちを思いやって誰にでもやさしくできる子  
高学年：人の気持ちを察し、相手の立場に立ち考えて行動できる子
- 最後までやりぬく子  
低学年：決めたことを最後までがんばる子  
中学年：責任をもって自分の仕事をやりぬく子  
高学年：より高い目標に向かって自ら進んでやりぬく子

○自分の思いを伝えられる子

低学年：自分の思いが相手に分かるよう  
に表現できる子

中学年：友達の考えと比較しながら自分  
の考えを表現できる子

高学年：自分の考えを整理して、目的に  
あった方法で表現できる子

(4) 研究の仮説

○動物との触れ合いや世話をすることを  
通して、相手へのやさしさの大切さに  
気づくことができるのではないか。

○動物の気持ちなどを察して世話をする  
ことにより、相手の気持ちを考えること  
や命の大切さが分かるのではないか。

○動物の世話をした経験を基に、相手の  
思いや立場などを考えて行動できるよ  
うになるのではないか。

(5) 動物介在教育とのかかわり

動物介在教育の7つの視点から各教科・  
領域等の年間指導計画の洗い出しを行い、  
研修の時間に協議した結果、その中から、  
理科・生活科・道徳での授業実践を図ることにした。

年間指導計画の洗い出し例（一部抜粋）

学年	教科等	月	単元名・教材名等
4年	国語	3	ごんぎつね
	理科	4	あたたかくなると
		6	暑くなると
	道徳	7	
5年	道徳	1	ごめんね、サリー(3-1 自然愛、動植物愛護)
	理科	6	生命のたんじょう
		7	
6年	道徳	2	コースチャボうやを救え(3 -2 生命の尊重)
	国語	4	生き物はつながりの中に
		5	
	理科	4	地球と生き物のくらし
		2	人とかんきょう
	道徳	6	愛華さんからのメッセージ (3-1 自然愛、動植物愛 護)

(6) 動物とのかかわり

低学年：動物と親しむことを通して、動物  
の心に気付くようになる。

中学年：日常的に世話をすることを通して  
観察を深め、動物の心が分かる。また、相手の気持ちも考  
え

られるようになる。

高学年：今まで体験した動物との触れ合  
いや世話をした経験を基にして、よりよい環境を考え実践で  
きるようになる。

(7) 獣医師とのかかわり

○生活科や理科の単元の中で専門性を生  
かした指導

○調べ学習などの指導補助

○飼育動物に対する問題解決と相談

○子どもたちの知識の裏付け

3 本校の実践

(1) 研究授業

○生活科の授業研究

2年 「生きものをそだてよう」

自分中心に考えている子や動物の立場にな  
って考えることが苦手な子も見られた。  
この活動を通して、リンリンの立場で気持ち  
を考えたり、役に立つ工夫を考えたりさせ  
て、リンリンをよりいっそう身近に感じ、  
自分たちと同じように快適な生活を送らせ  
る方法を考えさせることをめあてとした。  
子どもたちは、先生や親に聞いたり、本で  
調べたりしながらリンリンにとっての快適  
さを考えた活動を行っていた。

さらに、自分たちの考え方や方法が正しい  
かを獣医さんに聞き、専門的な指導により、  
自信をもって活動したり、意欲的に世話を  
するようになったりした。



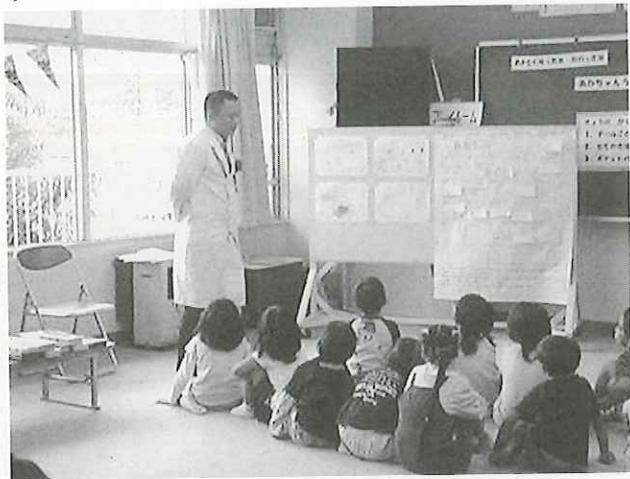
リンのためにできることを考えよう！

1年 「大きくなったね かわったね」  
生まれたときは小さかったウサギがどんどん  
大きく成長する様子を見て

気づいたことや子ウサギの変化する様子  
をグループごとにまとめ発表した。また、  
獣医さんの話を聞いて、より以上に愛着を  
もってこれからも成長を見守ろうとする気

持ちをもつことをめあてとした。

学校で生まれた子ウサギを身近なポケックトパークで飼うことにより、触れ合う機会が増え、細かなことまで観察できるようになった。また、獣医さんに、扱い方や世話の仕方等をていねいに教わり、怖がっていた子も一緒に世話をしたり遊んだりするようになった。



じゅういさんにきいてみたいことがあるよ！

#### ○理科の授業研究

##### 5年 「生命のたんじょう」

自分で観察した卵をビニール袋に入れ、いつも身近におき、孵化までの間、メダカの母になり、大事に育てた。卵から、無事に子メダカがかえったときの喜びは大変大きく、どの子も目を輝かせて担任に報告していた。小さなメダカにも命があること、誕生までにはいろいろな苦労があることを身をもって体験することにより、命の大切さを学ぶことができたと考えている。

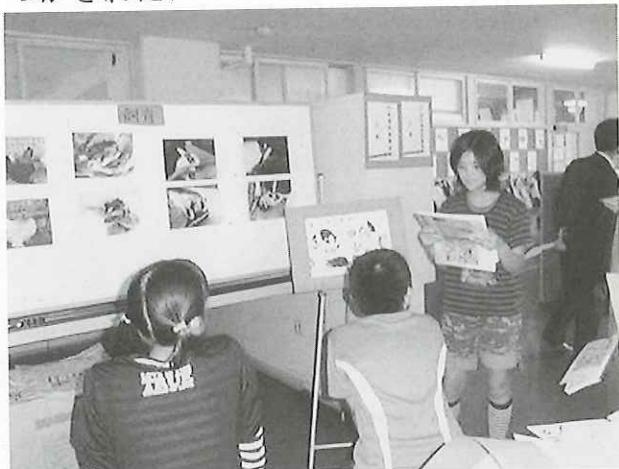


卵のまわりに毛みたいなものがあるよ！

##### 6年 「生き物のくらしとかんきょう」

身近な動物の食べ物について調べたことを話し合い、動物と植物のかかわりをウサ

ギやニワトリと比較してまとめることをめあてとした。個々に課題をもって調べ、工夫を凝らした発表をすることができた。ペットフードの基を調べることにより、形を変えて植物を食べていることに驚いていた。他のものへのかかわりについて考えることができるようになった。動物介在教育を意識しそうに、理科としての教科のねらいを第一に達成することにより、動物介在教育のねらいも達成されていることに気づかされた。



動物は、植物がいないと生きていけないんだね。

#### ○道徳の授業研究

##### 3・4年 「ヒキガエルとロバ」

重い荷物を引いてつらい思いをしていながらも、ヒキガエルをよけようとして鞭打たれるロバの気持ちを考えることにより、命の大切さを知り、身近な動植物にやさしくしようと接する心情を育てることをめあてとした。

自分を登場人物に置き換えて、心情を考えるためにお面を使ったりしたことにより、活発に発言していた。これから動物等との接し方を考える授業になった。



もういじめるのはやめよう！

### 3・4年 「ごめんね サリー」

自分のやりたいことが大切なのではなく、野生の動物のことを考えることを通して本当のやさしさについて考え、どんな動物にもやさしくし、自然を大切にしようとする態度を養うことをめあてとした。サリーのことを身近な動物にとらえるとともに、主人公「わたし」になりきって役割演技をすることにより、「わたし」のつらい気持ちや、鳥たちへの思いを感じることができ、日頃の飼育活動を通しての飼育動物とのかかわりについても考えることができた。



本当にサリーのことを考えてかわいがっていたのかな？

### (2) 飼育活動

#### ○飼育栽培委員会の活動

飼育栽培委員会は、縦割りグループ活動のリーダーとして、世話の仕方や餌のやり方、掃除の仕方等全体の活動の補足をしたり、ウサギやニワトリの名前の募集や決定をしたりするための集会活動などに取り組んだ。

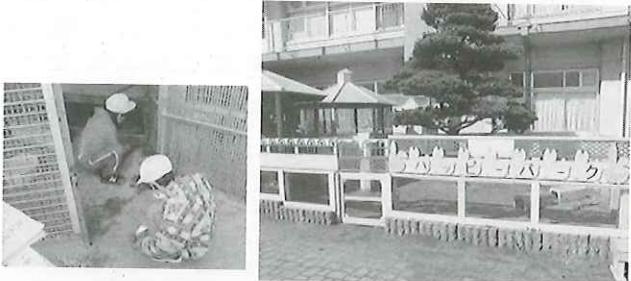
今まで飼育活動したことのない低学年の児童たちに、親切に教えたり、やらせたりすることにより、縦割り飼育も順調に軌道にのせることができるようになってきた。

#### ○縦割り飼育当番活動

##### <ハッピーパーク>

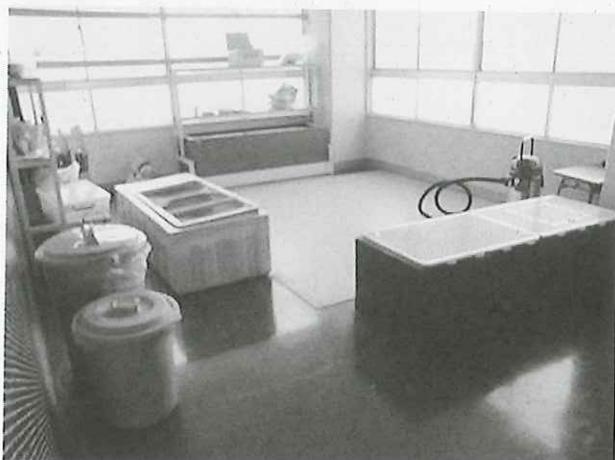
業間休みになると、3年生から6年生までの縦割り担当グループがハッピーパークの飼育小屋に集合し、飼育栽培委員が作成したマニュアルをもとに世話をしている。高学年が授業等で世話ができない時には低学年だけでもえさやりや掃除ができるようになった。委員会だけで世話をするときよ

りも、小屋の掃除もこまめにできるようになった。



<ハッピーパーク>

1・2年生は、2階のハッピーパーク(約10畳)で、モルモット1匹とウサギ3羽を飼育している。上級生と世話をしたことを生かして、身近なところで動物と触れ合うことができ、自分たちの動物であることを意識して、より深い愛着をもって世話をしている。



中には、カーペットを敷き、子どもたちと飼育動物が触れ合うこともできるようにしてあります。

### 4 成果と課題 (○: 成果 ●: 課題)

○意識的に動物介在教育の視点を各教科領域等の学習の中に取り入れることにより、今まで動物や友だちのことをあまり気にしなかった児童が、この取り組みを通して少しづつ、人や動物を思いやる言動が見られるようになってきている。

○学校飼育動物と接する機会が増えたことにより、動物に接することが苦手な児童も、うさぎやにわとり、モルモットなど、それぞれの動物の違いを知ることにより、動物に対する愛着が湧き、動物のことを考えて世話をするようになってきている。また、飼育小屋の掃除や糞の始末を嫌がっていた児童も、飼育動物の気持ちになって考え、友達や他学年の子と協力してできるようになってきている。

●縦割り当番活動は充実してきて、平日の

当番活動は順調に行えるようになってきたが、土・日などの休みの日や長期休業中の飼育活動は、教職員が行っている。保護者や地域、スポーツ少年団等にも協力を呼びかけ、飼育活動を自主的に行えるように啓発していきたい。

●無理をせずに動物介在教育の姿勢を整え

られるよう、指導法の工夫改善をし、より動物介在教育に迫れるよう、生命尊重や思いやりの心を育む教育活動を開拓していくよう努力していきたい。

(さいたま市立馬宮西小学校教諭)

